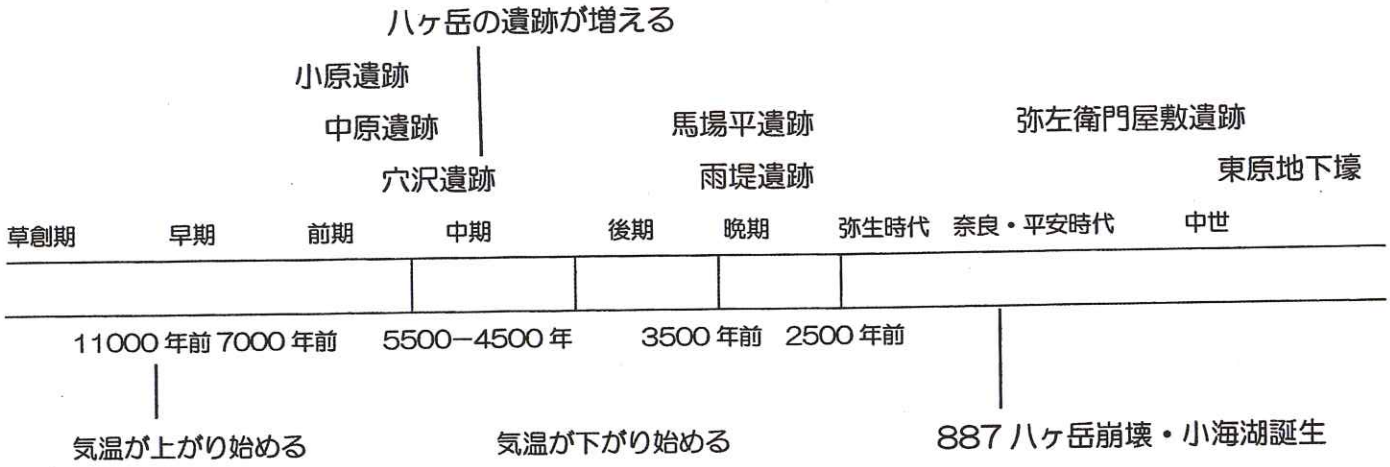
－小海町の原始と古代－

町内の遺跡では縄文の前期初頭の小原遺跡、中期初頭の穴沢遺跡などがあり、特に穴沢遺跡の住居跡ではこの時期には珍しい縄文人が祭礼に使ったと思われる『石棒』が見つかり、発掘時では日本最古の時代の石棒といわれました。

『天狗岩岩陰遺跡』では弥生時代の土器や人間の骨格なども見つかっており、ここは狩猟や、交通の場として使われていたようです。

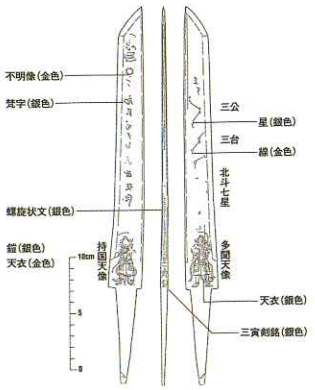
奈良、平安時代になると小海町は信濃の国佐久郡余戸郷に組み入れられ10世紀頃には此処でも親沢に「弥左衛門屋敷遺跡」小海原に「雨堤遺跡」塩の平に「馬場平遺跡」など墨書土器や日常使う土器などが見つかっています。松原の伊那古明神『現在の諏方明神』もこの頃の創建と伝えられています。

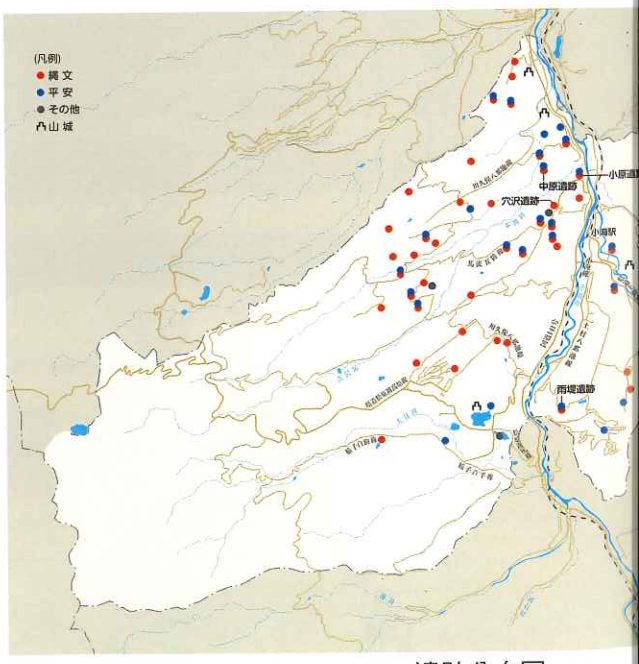


－まぼろしの三寅剣－

三寅剣は長さ34.5cm刃渡り25.4cm、他に類を見ない多様な文字、文様が象嵌されている。この三寅剣は金銀象嵌の仏像を刃の両面に、峯に縄目、ハバキに近く三寅剣の文字あり、日本刀剣史上に重要な意義をもつものである。

朝鮮李朝では三寅剣、四寅剣を造っているが、松原の三寅剣の書体は古式で、7-8世紀代の剣名として重要な意味を持つ。剣の右側面の上、下に二天王像、その間に北斗七星、三台・三公の三星座。左側面の上下に二天王像その間に九字の梵字真言を配しているがそれらの内一部は研ぎべりによって落失している。剣表の多聞天像、裏の持国天像は特色が中国唐代のものと推測される。金銀象嵌を一振りの刀の中に併用する例はほとんど見られない。仏教、道教の思想による護身剣である。





遺跡分布図